



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	音による人間・非人間関係 : モンゴルドンドゴビ県ホラト村における家畜に対する歌やかけ声を中心に
Author(s)	サリントヤ
Citation	北方人文研究, 18, 159-176
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94488
Type	departmental bulletin paper
File Information	18_08_159-176_Sarantuya.pdf



音による人間・非人間関係 —モンゴルドンドゴビ県ホラト村における家畜に対する歌やかけ声を中心に—

サリントヤ
(北海道大学大学院文学院)

要旨

本稿は、モンゴルの遊牧社会において、人間と動物が音や歌を通じてどのように信頼関係を築くのかを解明し、家畜とともに生きる文化を新たな視点から捉えることを目的としている。モンゴルの春、特にゴビ地域では、強風や砂嵐などの激しい気候変化が起こる。また、この時期（3月～5月）は家畜の出産期でもあり、牧畜民にとっても家畜にとっても困難の多い季節である。この時期には病気や難産によって母親や子畜が死亡し、生まれたばかりの家畜が孤児になることや、雌の家畜が自分の子を拒絶することがよくあるからだ。このような場合、牧畜民は、母親と子の絆を深め、授乳を促すために、種特有のかけ声や歌を用いて母子関係を修復することがある。本稿では、モンゴルドンドゴビ県ホラト村におけるラクダやヒツジに対する歌を歌う事例を取り上げ、実際に歌によって母子関係や養子縁組が成立する様子を描いた。また、こうした家畜に対する歌が、モンゴル遊牧社会における文化的・精神的な伝統やシャーマニズムとどのように関連しているのかについても考察した。さらに、近年の人類学的視点、特にマルチスピーシーズ人類学の視点を取り入れ、音や歌が人間と動物の感情的なつながりを生み出す上で重要な役割を果たしていることを示唆した。

キーワード：モンゴル、遊牧民、ヒツジ、ラクダ、音、マルチスピーシーズ人類学

1. 序論

モンゴルの遊牧民は、五家畜と呼ばれるウマ、ヒツジ、ヤギ、ウシ、ラクダなどの群居性の家畜を飼い、生計をたててきた。モンゴルの春、特にゴビ地域は、強風、砂嵐など激しい気温変化が起こる季節になる。また、この時期（3月～5月）は家畜の出産の時期でもあり、遊牧民にとっても家畜にとって同様に困難を伴う季節である。なぜならこの時期、病気や難産で家畜の母親か子畜が亡くなり、生まれたばかりの家畜が孤児になったり、雌家畜が自分の生まれたばかりの子を拒絶したりすることがよくあるからだ。このような場合、遊牧民は、家畜の子の代わりに雌家畜と接触することや、家畜の子と母親の絆を深め、授乳を促すために種特有のかけ声や歌を使い母子関係を修復することがある。家畜に歌を歌うこの習慣は、昔からモンゴル遊牧地域で出産時期に広く使われてきたが（小長谷 2024：16）、いつからどの地域で母子関係修復のためなどの用途に歌われるようになったかについては、ほとんど研究されていない。しかしこの習慣は、モンゴル遊牧社会における牧畜の技術であり、異種コミュニケーションの方法でもあり、家畜の世話やケアを促進するなどさまざまな役割を果たしている（Hutchins 2019：1）。このなかでも特にラクダに向けて歌を歌う習慣はユネスコ無形文化遺産として登録されている。本稿で取り上げる家畜の世話やケアを促進する

ための家畜に向けて使われるかけ声や歌を歌うこの実践の事例は、音による人間と動物、人間と人間、そして土地の関係まで影響を与える多種の絆を結びつけると考えている。

近年の人類学研究では、存在論的転回と呼ばれる「自然と文化」の分断を問い直す試みが注目されている (Holbraad and Pedersen 2017: 3)。それまでの人類学的研究は単一の「自然」に対して様々な「文化」があり、「文化」をもつ「人間」が主体として「自然」に働きかけるという構図のもとで行われていたが、存在論的転回は人類学が自明のものとしてきた「自然と文化」の二元論を見直し、「自然」もまた「人間」に働きかける主体として考えていく方向性を示した。その中でも、マルチスピーシーズ人類学は、人間中心主義からの脱却を目指し、異なる種が「ともに生きる」在り方を数多く描き出し、動植物やモノを含む「自然と文化」が絡まり合う世界を描き出す民族誌的な試みが推し進められている (山口 2014; コーン 2016; ウィラースレフ 2018; チン 2019)。奥野によれば、マルチスピーシーズ民族誌/人類学は、人間を静的な「人間—存在 (human being)」ではなく、動的な「人間—生成 (human becoming)」と捉える。この視点では、人間と人間以外の存在という二元論の枠組みの中で展開される人間と他種との単なる二者関係ではなく、人間を含む複数の種と「絡まり合い」ながら共生することを強調する (奥野 2019: 7)。また、彼は人間主体の視点のみで他種を捉えるべきではなく、他種は単なる象徴的・唯物論的な対象ではないと述べている (奥野 2019: 7)。

近年、牧畜社会における人間と家畜各種の主体性を巡る議論が多くの研究者の注目を集めており、ようやく家畜側と人間側の連なる関係を述べるができる素地が整いつつある。例えば、人類学者の波左間は、東アフリカ牧畜社会において、家畜と人間の非言語・言語的なコミュニケーションが成立しているかについて実証的に調査をおこなった。そして搾乳や子家畜の保護、放牧への同行などのときにみられる家畜と牧畜民の身体的な接触と近接関係を記述することによって、家畜が自分の名前を呼ばれることや牧畜民の身振りに対して的確に応答していること、家畜側も牧民を優位者・保護者として認知し受容していると明らかにした。

また、モンゴル遊牧社会における家畜と人間の関係の研究としては Fijn による“Living with Herds: Human-Animal Coexistence in Mongolia” (2011) がある。Fijn はモンゴル遊牧社会に関する人間と家畜の関係性をマルチスピーシーズ人類学の観点からも述べておりモンゴル研究に新たな視座をもたらした。例えば、モンゴル遊牧社会における動物の家畜化のプロセスや人間と動物の関係の両面を観察し、日常生活において家畜に対する行動、相互的コミュニケーションなどを調べ、その中で歌やかけ声などを取り上げ、モンゴル遊牧民の生活に家畜がどのような影響を与え、家畜自身が家畜化プロセスに積極的なパートナーとなっていると示した。

しかし、Fijn (2011) を含め、これまでの人間と動物の関係を巡る議論では、家畜に対する音楽やかけ声といった音が遊牧社会においてどのような意味を持つか、また、特に遊牧社会における音によって起こる人間と非人間を結びつける感情という側面についてはふれていない。また、エージェントを含めた人間中心主義の概念を拡張し人間以外の存在との関係性についても言及する必要がある。マルチスピーシーズ人類学の視点からエージェントを介した人間と人間以外の身体や感情のつながりについて注目する必要がある。こうした点を乗り越えるために人間と動物を繋ぐ音 (音楽) に着目し、Fijn の議論を批判的に継承しながら動物と共に生活しているモンゴル人や遊牧文化を感情的な側面から捉えることで、モンゴル遊牧社会の人間と動物の関係を新たな視点から描くことが本論文の目的である。

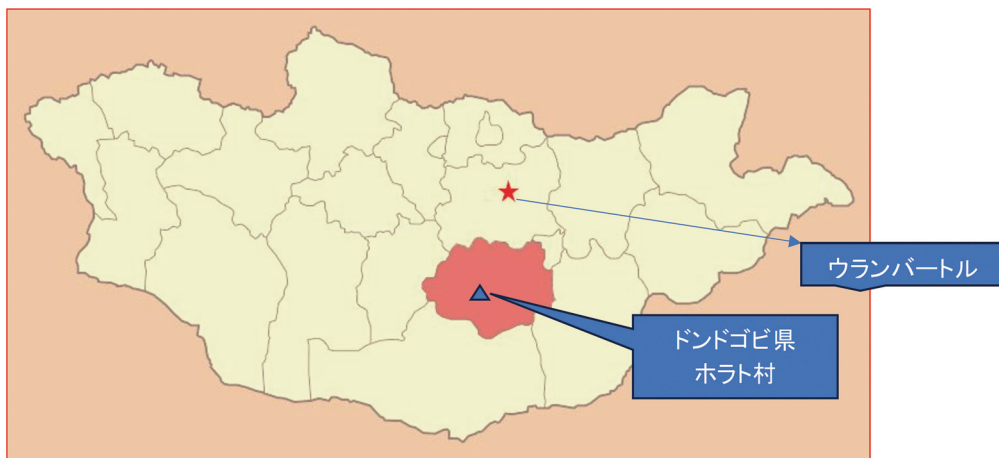
これまでのフィールドワークによって得られた資料や人々の話を分析したところ、人間と非人間

は音や音楽によって互いに影響を与え合っていることが窺えた。このことから、モンゴル牧畜社会における音や音楽を介した人間と家畜が、それぞれの感情含め、音や音楽を通じてコミュニケーションすること、モンゴルの環境や人間と動物の身体まで響いていることをマルチスビーシーズ人類学の観点を取り入れながら論じたい。

2. 調査の概要

2.1 調査地概況

ドンドゴビ県は、モンゴル中南部に位置し、北には草が茂った半乾燥の草原があり、南には低木地帯の半砂漠が広がっている。モンゴルの春は短いが、3月中旬から4月末までの約45日間は家畜の出産シーズンにあたることから牧畜民と家畜にとって重要な季節である。この時期、砂嵐や毎晩の凍結に加え、冬に衰弱した家畜が死んでしまうことがよくある。この際、難産で雌家畜が死亡することで、子家畜が孤児になったり、子家畜が生まれた後に病気や何かの原因で死んでしまうことや、栄養不足などが原因で雌家畜が子家畜を拒絶することもある。一方、この地域の秋は比較的穏やかな季節である。家畜は春の出産を終え、夏の間ずっと肥育するため、秋は、畜群れが最も穏やかで安定した状態になる。



地図1 モンゴル国ドンドゴビ県ホラト村

出典：https://en.m.wikipedia.org/wiki/File:Dundgovi_in_Mongolia.svg

ドンドゴビ県では、ほとんどの牧民家が五家畜を飼育している。五畜ごとに異なる授乳歌があり、それぞれの種の歌は異なる言葉とわずかに異なるメロディーで構成されている。遊牧民が家畜に向けて歌う歌のメロディーや歌詞は、地域ごとに異なる。しかし、筆者が調査したドンドゴビ県ホラト村では、トイグはヒツジやヤギ、オブーはウシ、ホースはラクダ、グルーイはウマに対して使われていた。独特な言葉は場面や個体に対して意味が異なる。搾乳や家畜に歌を歌う際、これらの独特な言葉を使っていた。ほかに日常生活の中で使われている独特な言葉もある（表1、2、3、4参照）。人間の日常会話では意味を持っていないが、この独特な言葉を使うことによって特定の動物を落ち着かせる効果があるといわれている。また、家畜にむけて歌を歌うことにおいては、家畜の種によって歌に異なる名前を付けている。例えば、ヒツジに対しては「トイグの歌」、ラクダに対

しては「ホースの歌」と言われている。家畜の「聖歌」と言っている地域もある。本稿では、ヒツジとラクダにむけて歌を歌うとき使われている「トイグ」と「ホース」というかけ声を使って歌うことに焦点を当てて述べたい。これは筆者が最も多く経験した例であり、幼い頃から母や祖母と一緒に実践してきた事例だからである。

2.2 研究手法

本研究で提示する事例は2022年3月～8月の6ヶ月、2023年7月～9月の3ヶ月、合わせて9ヶ月の2回実施した。モンゴル国ドンドゴビホラト村における参与観察、インタビュー資料収集などのフィールドワークに基づいている。フィールドワークでは、五畜を飼育している夫婦のバヤルさんとチチグさんの家に滞在しながら、周辺の牧民家5人と音楽家Dさんにインタビューや聞き取り調査を行った。また、モンゴル国立大学およびモンゴル研究センターの協力を得て、実施した。

1日のインタビューは60～90分間で、事前の許可を得て記録した。また、インタビューはモンゴル語で行い、それを文字にして日本語で翻訳した。本稿では、対談者の言葉を日本語に翻訳した。

3. 家畜に歌を歌うこと

3.1 ラクダのために歌う

バヤルさんとチチグさん夫婦の2人は、ドンドゴビ県ホラト村で育ち、幼い頃から遊牧生活をしていた。夫婦2人は、五家畜（ヒツジ、ヤギ、ウシ、ラクダ、ウマ）を飼育している。筆者が数か月間滞在していた間に母ラクダたちの出産時期があった。最初の1週間以内に、母ラクダ1頭が子ラクダを出産し、数日後、子ラクダが死亡した。子を失った母ラクダは、出産経験も搾乳経験もなかった。母ラクダは、死んでしまった子のそばを離れず、非常に悲しげな声で鳴いていた。

翌日、バヤルさんは死んだ子ラクダの遺体を処理した。母ラクダは涙を流し、悲しげに鳴いた後、乳房からばたばたと乳が流れ出ていた。このように母ラクダは子ラクダが病気などで死んでしまうと、悲しげな泣き声をあげ、涙を流し、乳があふれ出ることがよくある。

その後チチグさんは母ラクダと積極的に接触するようになった。チチグさんはこのように語っていた。「子を失ったラクダは、出産の経験がない若いラクダだから、しっかりあやしてあげたほうがいいよ。明日から歌を歌いながら搾乳するよ。そうすると、母ラクダは乳腺炎にもならないし、搾乳したラクダの乳を、孤児になった子ヤギや子ヒツジにあげることもできる」。翌日、チチグさんとバヤルさんは、母ラクダに歌を歌いながら搾乳の準備をしていた。最初に、ラクダの後ろ足を紐で縛り、その後、チチグさんは母ラクダの体を何度も優しく撫でながら、「ホース、ホース」という掛け声を使い、メロディーや装飾を変えつつ歌い続け、何度も搾乳を試みた。この間、ラクダは搾乳を嫌がって動き回っていた。だがこの作業を3日間続けた結果、ようやくラクダは搾乳に応じるようになった。母ラクダはチチグさんの体や服を何回も嗅いだり鳴き声を出したりしていて、チチグさんから離れようとせず、チチグさんの姿を見失った時もずっとチチグさんの姿を探ようになった。しかし、チチグさん以外の人には密接することはなく、チチグさんがゲルにいないとゲルの周りを鳴きながら走り続けていた。

ある日、チチグさんが孫に会いに行くことになり不在だったため、バヤルさんと筆者が母ラクダを搾乳しようと試みたが、やはりチチグさん以外の人が近づくと蹴るといった攻撃をした。このようにチチグさんが数日をかけて歌を歌うことで母ラクダと「母子関係」を作り、チチグさんと母ラクダは信頼関係を築くことができたのだと考えられる。もし、歌を歌わず、強制的に搾乳しようと



写真1 歌を歌いながらラクダを搾乳しているチチグさん（筆者撮影 2022年5月）

すればラクダはどうなるのかとチチグさんに聞くと「特にラクダは敏感な動物（ウーヤン アミタン）だから、歌を歌ってあやす必要がある。このラクダが子を失って悲しんでいるので人間のケアや癒しが必要だよ」と語ってくれた。このように歌はチチグさんと子を失ったラクダの間を仲介する力として働き、その際に歌が動物の身体だけでなく心にまで響いていることがわかる。上述したような歌を使用して遊牧民が動物の子になるなどの事例はモンゴル遊牧社会では昔から今でも家畜の出産時期に行われている。

遊牧民にとって、家畜は単なる財産ではなく、家族のような存在であり、特に母子関係を重視する文化が根付いていた。そのため、母ラクダに歌を歌い、「人が子ラクダの役割を果たす」風習は、古くから実践されていたと考えられる。また、モンゴルでは古来よりシャーマニズムが信仰され、人と動物の霊的なつながりが重視されてきた。モンゴルのシャーマン（ボー）は、動物の精霊と交信する能力を有するとされ、特定の動物の霊を人間が受け継ぐという信仰が存在する（Atwood, 2004; Humphrey & Onon, 1996）。このような信仰体系において、遊牧民が特定の音声や歌を用いて動物とコミュニケーションをとる行為は、単なる実践の技術ではなく、宗教的・霊的な意義を持つ文化的実践の一環として捉えられる。

特に、遊牧民が歌を通じて動物の子になりきるという行為は、モンゴル遊牧社会における象徴的・儀礼的な伝統として位置づけられる。この行為は、単なる擬態や模倣ではなく、シャーマニズム的な信念体系のもとで、動物と人間の関係性を媒介する手段として機能してきたと考えられる。また、このような行為は、母畜と孤児となった子畜の養子縁組を促進する実践と密接に関連しており、遊牧民は種特有の音声や歌を用いることで、母畜が自らの子と認識するプロセスを誘発する。モンゴルの遊牧文化において、人間と動物の境界は固定的なものではなく、霊的な次元において流動的で

あり得る。このため、遊牧民が動物の子になりきる行為は、母畜との社会的関係を再構築するだけでなく、より広範なモンゴルの宇宙観や世界観とも結びついていると考えられる。このような考え方の延長として、遊牧民が歌を通じて動物の子になりきることは、自然なことで受け止められてきた可能性がある。遊牧民が動物の子になりきるという現象は、モンゴル遊牧社会において古代から受け継がれてきた文化的・精神的な伝統であり、シャーマニズムや遊牧生活の実践の中で自然に生まれたものと考えられる。これは単なる作業の一環ではなく、動物との共生を大切にするモンゴルの人々の哲学を反映した、奥深い伝統といえるだろう。次の節では、歌を歌って養子縁組を作る事例を紹介する。

3.2 養子縁組を作る歌

3月から5月の間、ヒツジやヤギも出産時期を迎え、バヤル夫婦は毎日忙しかった。80頭が出産し、その中の母ヒツジ2頭が出産中に死亡したため、子ヒツジ2頭が孤児になった。バヤルさんが孤児の子ヒツジをヒツジ用の囲いがある向こう側に連れて行き、元気で健康そうな母ヒツジを選び一緒に隔離した。これはヒツジと子ヒツジの養子縁組を作る準備している。バヤルさんは左腕を母ヒツジの首に回し、右手で孤児子ヒツジをしっかりと抱きしめて静かに安心させた。その後、チチグさんは母ヒツジに向けて「トイグ、トイグ」と歌い始めた。このようにヤルさんとチチグさんは毎晩ヒツジを囲いに連れて行き、歌を歌い続けていた。出産シーズンの残りの期間を通して夫婦は「トイグ」歌を利用し、2頭の子ヒツジと新しい母親の絆をつくりだし、その結果、養子縁組という形で母子関係が成立した。バヤルさんは歌うこと自体がヒツジに乳を与えるものであり、その歌声がヒツジや子ヒツジを落ち着かせるのだと説明した。この「歌う自体がヒツジに乳を与える」というこの表現は、単なる比喩ではなく、実際に遊牧生活の中で実践されてきた伝統的な慣習に基づいている。モンゴルの遊牧民は、乳搾りの際、家畜に歌を歌うことで家畜の乳の出が良くなると信じている。この家畜に歌う歌のリズムやメロディーは、持続的で柔らかな旋律を特徴とし、家畜に安心感を与える役割をしている。遊牧民は長年の経験を持ち、歌が家畜に感情的な影響を与えることを知り、この習慣を受け継いできたと考える。

バヤルさん夫婦が養子縁組と関係で結ばれた子ヒツジと母ヒツジを群れから隔離し、全ヒツジの群れに歌を歌うことによって、動物たちはお互いの存在を感じることができるようになる。

この見方を表明したのはバヤルさんとチチグさん夫婦だけではなく、筆者の出身地である内モンゴルの牧畜民も同様な認識をしている。歌うことでヒツジは落ち着くし、授乳するようになるというのは、内モンゴル遊牧地域とモンゴル国遊牧地域の共通点である。家畜に向けて歌うことは、授乳を促進するのに非常に役立つ作業であるため、調査地であるドンドゴビ県ホラト村のほとんどの人びとが搾乳中に家畜に歌を歌っていた。

筆者はバヤルさん夫婦に家畜の子供の拒絶反応に対処する他の方法があるかどうか尋ねたが、彼らは「いいえ、家畜に歌を歌うだけです」と答えた。つまり、「トイグ歌」を歌うことだけで家畜の関係を修復しているということである。モンゴル全土の他の牧草地や、より広く言えば中央アジアの草原では、遊牧民はさまざまな方法で家畜の母子関係を修復しているが、筆者が調査した調査地域では、歌うことが彼らの唯一の手段であると強調した。歌を使用して新しい母親に引き取られた2頭の子ヒツジのうち、群れに復帰した後にこの新しい子ヒツジを拒否した母ヒツジは1頭もいなかった。

家畜に歌う歌は牧畜民たちにとって、ヒツジの母子関係を修復し成立させたりする一つの手段で

あり、感情的な実践にもなる。また、孤児または捨てられた子ヒツジを養子縁組せずに死なせてしまうことがあれば、収入減少になり、バヤルさんとその家族の経済的な問題にもつながる。その意味でバヤルさんはこの歌を使用することによって母ヒツジと子ヒツジの絆をつくり、経済的な問題も解決できた。またバヤル夫婦は歌を通じて家畜に感情的なものを与えたのは母ヒツジと子ヒツジに慰め、信頼関係を作ることだった。母ヒツジや子ヒツジたちを群れに戻す際、バヤルさんたちは、群れの家畜にも同じく歌やかけ声を使う。これによって牧畜民や家畜の感情をさらに高め、互いに信頼関係を作る。この実践を可能にするのは音楽であり、音楽が母ヒツジと子ヒツジ、人間の間を仲介し、遊牧民とヒツジが音楽に感情的に関与し、互いの感情を動かす力や不安を取り除くことができた。つまり、音楽は母ヒツジと子ヒツジに対する母子関係の絆を作り、母家畜と子家畜たちが群れに戻れるようになり、この歌が群れを維持するための機能的なツールになると考えられる。

3.3 搾乳歌

調査地では、春が過ぎ、夏を迎え、家畜の出産時期も終えた。2022年と比べて今年は雨の日が多いので家畜は太り続けている。世話をする孤児や拒絶された家畜はもういないが、搾乳の時期がきている。毎年7～8月にドンドゴビでは伝統的な歌の祭りが行われる。バヤルさんは「親戚や友達が町や他の県から歌の祭りを見に来るので、馬乳酒（アイラグ）を準備しないといけない」と言う。アイラグは、モンゴルの遊牧民社会において重要な社交的・儀式的な役割も担っている。例えば、バヤルさんが言ったように訪問者に歓迎の意を表すために提供されることが多く、家族や部族間の絆を深めるためのコミュニケーションの道具にもなっている。

バヤルさんはアイラグを作るため、母ウマと子ウマを集め、搾乳することになった。ウマたちを囲いに入れ、子ウマ（今年春に生まれたばかり）だけを囲いの外側に出して紐で繋ぐと、母ウマの乳をよく出すために最初だけ子ウマを囲いの中に入れて少しミルクを飲ませ、母ウマが安心するように子ウマをそばに置き、チチグさんが搾乳し始めた。今度はラクダとヒツジや子ヒツジに歌うのと同じように母ウマにも歌い、ヒツジを落ち着かせる音「トイグ」、または「ホース」ではなく、ウマを落ち着かせる音「グリーイ」を使用した。

チチグさんが「グリーイ」とウマだけに対するかけ声をウマにむいて歌うとき不思議と乳がよく出るようになり、歌を聞いたウマは動かずに受動的に搾乳に協力するようになっていた。搾乳後、ウマの乳を革の容器（huhuur）に入れ、数千回空気と混ぜながら攪拌すると馬乳酒ができる。モンゴルでは野菜が乏しいので、ビタミン・ミネラルが豊富な馬乳酒が遊牧民の夏の主食になっている。このように搾乳中、バヤルさん夫婦は乳を出すことを促すために、搾乳が終わるまで母ウマに向かって歌い続けていた。モンゴルではアイラグを酒として飲むことが多く、祭り、結婚式、競馬などの場面ではなくてならないものだが、長い歌もそれと同じくらい重要とされる。長い歌（オルティンドー）がなければ祭りが始まらない。バヤルさんは「ウマから出る乳は、ウマが食べる草を通じて人々と家畜、そして土地とを結びつけている」と語った。これはこの土地の水や牧草を家畜が食べ、歌を歌いながら家畜を搾乳し、その家畜の身体から出る乳を遊牧民がアイラグとして飲むことによって、土地と動物と人間の三者が相互依存的に結びつけてられるということだと理解できるだろう。つまり、アイラグは、遊牧民にとって重要な飲料であると同時に、土地と自分たちをつなぐ象徴的な存在である。馬が食べる草は土地から得られ、家畜はその草を摂取することによって生命を維持し、乳を産出する。土地、家畜、人間の間に密接な相互依存関係を生み出しながら、土地の健全性が家畜の健康に直接的な影響を与える。また、家畜に音楽を利用して馬乳が集められるという



写真2 馬乳酒を入れる革の容器 (huhuur) 筆者撮影



写真3 ウマを搾乳している様子 筆者撮影

ことは、音と音楽は人間と非人間の間を結びつける仲介力として働きかけ、それらに何らかの作用や影響をもたらしている。歌は個人の行動を超えて、共同体や文化全体の一体感を築く手段として機能していると考えられる。

3.4 オルティンドーと家畜専用の歌の比較

ラクダやヒツジにうたう歌や搾乳する際に歌う歌は筆者が幼い頃から聞いていたモンゴルの伝統的な歌の一つであるオルティンドーと非常に似ている。オルティンドーは直訳すると「長い歌」となる。この歌は、その名の通り、長く、感情的に深い表現を特徴としている。オルティンドーは、遊牧民の生活や自然、さらには動物との関係に対して深い愛情や尊敬を表現するために歌われる。ゆっくりとしたメロディーで、広大な風景や自然の静けさを反映する。時々、リズムは自由で、即興的な要素も多く見られる。以下、家畜専用の歌とオルティンドーを比較してみよう。

Madison-Piskatá は「オルティンドーには風景の道徳的性質、つまり、ゴビ地域の静けさをコード化し、パフォーマンスを通じてそれを再現する特別な力がある」(Madison-Piskatá2018)と説明している。良い歌は、社会空間、草原の平和と広大さをもたらし、良い家畜専用の歌が母家畜や子家畜に同じく平和をもたらすと筆者は考えている。特に遊牧社会において、歌が持つ精神的な力が重要な役割を担っているため、草原の平和や広大さ、さらには家庭関係にも歌が深く結び付いている。そのため、家畜と遊牧民の間は単に物理的な関係を超えて、精神的なつながりも関連する。優れた歌は、家畜に安らぎをもたらす共に家畜を飼育する遊牧民に対しても心理的な安定を提供する。遊牧民は、草原での移動に伴うストレスや不安が生じることがあるが、歌にはその不安を表現する場合もあり、また同時に自然との調和を維持するための精神的な支柱として機能することもある。

バヤルさん夫婦はラクダに歌を歌うとき「ホース、ホース」、羊に歌を歌うとき「トイグ、ドイグ」、馬に歌を歌うとき「グリー、グリー」というかけ声を使ったが、これは家畜を落ち着かせる目的以外には意味がないと説明した。一方、オルティンドーを歌うときには、バヤルさんたちは歌詞を伴って演奏していた。また、ウマは遊牧民の生活と最も密接な関係があり、欠かせないものである。モンゴルのウマはしばしばオルティンドーの題材となり、その歌詞にはウマの速さ、ウマの色、歩幅、年齢の違いがよく出てくる。遊牧生活を表現するために遊牧民がウマを擬人化することもある。例えば、「仔馬の子守歌」では、遊牧民が生まれたばかりの仔馬に向けて子守歌を歌い、未来の名馬になることを願い、母馬のように優しく語りかける。この歌は馬を擬人化し、まるで子どものように優しく語りかけ、遊牧民の馬への愛情と、未来への希望を感じる曲である。

また、オルティンドーはさまざまなウマの色と道徳的教えを組み合わせた詩が多く、牧歌の哲学的領域を探索することもできる。特に、オルティンドーには自然や動物に関するテーマが多く含まれ、ウマの色や特徴が詩的に描かれることがよくある。これは単なる美的表現ではなく、それぞれのウマの色や性格に象徴的な意味が込められており、道徳的・哲学的な教訓と結びついている。たとえば、白馬は純粋さや神聖さを、黒馬は強さや忍耐を、栗毛の馬は情熱や活力を象徴すると考えられている。また、オルティンドーはモンゴルの牧畜民の精神世界を映し出すものであり、ただの娯楽ではなく、瞑想的・哲学的な要素を持っている。その旋律は広大な草原や山の谷の静けさを表現し、歌を聴く者にモンゴルの自然と調和した生き方を思い起こさせる。こうした特徴から、オルティンドーは単なる歌唱ではなく、モンゴル文化の深い精神性を伝える手段としても重要な役割を果たしている。

家畜に対する歌の最終的な目的は、母家畜に乳を促し新しい子家畜に乳を飲ませることである。

動物同士の関係が確立されると歌い手は継続して歌を歌うことを止め終了になる。家畜の歌が最初から最後までメロディーに直接従うことはほとんどない。しかし、オルティンドーの曲として、より構造的に演奏し、歌詞を分割する特定の始まりと終わりを持つメロディーをなぞっていた。

バイルさんの家畜に歌う歌とオルティンドーの間には、2つの重要な類似点があることがわかった。筆者が聞いていたオルティンドーの全体的なメロディー、装飾音の配置と音、歌手や演奏によって大きく異なるオルティンドーの側面は、バイルさん夫婦が家畜に乳を飲ませる歌として使用したものと同じだった。特に、オルティンドーの中でよく使われている長い高音をヒツジやヤギ、ラクダ、ウマを搾乳する際に何度も使っていた。もう一つの共通点は搾乳際に歌う歌は、一定のリズムや繰り返しのメロディを持つことが多い。オルティンドーも、しばしば一定のリズムや繰り返しのフレーズを用いて、自然との調和や遊牧生活を讃える形で歌われる。特に、歌詞が自然や動物との共生をテーマにしていることが多く、これもオルティンドーと家畜に対する歌の共通点の一つと言える。

また、オルティンドーにしろ、家畜の歌にしろ、どちらにしても彼らは落ち着いた雰囲気を作り出すことが目標である。筆者も調査地の協力者と同じように、歌い手は歌い手として家畜にも人間にも同様の安らぎをもたらす発揮していると思った。モンゴル遊牧民は競馬競技において、馬や騎手の士気を上げるためギンゴ（Giingoo）という歌を歌うことがある。このときの発声や歌声は、搾乳するときの発声や歌声と比べると力強く、強い音波振動を生み出していた。騎手がかなり高く突き刺すような声を出すことは、厳しい遊牧環境における子どもの力強さを表現しているように思えた。モンゴル遊牧社会における動物に対する発声、乳搾りの歌¹⁾、ギンゴ（Giingoo）²⁾と呼ばれる競馬の歌、風景との交流など、これらはすべてオルティンドーで使われる発声法や音楽的アイデアの基礎につながるものである。このように、モンゴルの歌手の音／音楽作りは、単に歌手の芸術的、演奏的表現ではない。モンゴル歌手にとって音楽は単なる表現手段にとどまらず、彼らの生活環境や精神的領域と密接に関連している。音楽は文化的な表現にとどまらず社会的・経済的活動とも深く結びついている。

3.5 子守り歌

牧畜民が家畜に家畜専用の歌を歌うことによって乳を飲ませるのはなぜなのか、筆者は音楽が作用しているのではないかと疑問を抱いていた。これについて牧畜民であり、プロの音楽家であり、音楽教師でもあるDさんに聞いてみた。Dさんは牧畜民が授乳中の家畜に歌う歌は、人間が子供のために歌う子守唄と同じ機能があると主張した。モンゴルでは子守り歌を子守り歌と言うのではなく「ブーブイの歌」という。形式的には、家畜に乳を飲ませる歌に非常によく似ており、子供を落ち着かせて眠らせるために、半即興のメロディーに合わせて「büüvei ブーブイ」という単一の単

1) 搾乳歌の歌詞：オシドリが来るころ、茶碗ほどのおまへの乳房を誰が吸うかトイグトイグ。ツルが来るころ、鍋ほどのお前の乳房を誰吸うのか、トイグ、トイグ。春の黒い嵐に際し、おまへの肋骨を誰がふさぐのか、トイグ、トイグ。冷たい冬の季節に際し、おまへの胸を誰が暖めてくれるか、トイグトイグ。搾乳歌は地域によって歌詞の内容も多様である。

2) ギンゴの歌詞：ギンゴアー ホー 慈悲深く 美しく オー

アー ホー 慈悲深く 美しく オー、アー ホー 慈悲深く 美しく オー

大いに 粘り強く 美し オー、アー ホー 慈悲深く 美しくオー慈悲深く 美しく

大いなる 知識 慈悲深く 美しく オー慈悲深く 美しく、オー ホー ホー 慈悲深く 美しく ホー

語を繰り返す。筆者の母もこの「ブーブイの歌」を歌いながら寝かせていたと言っていたし、筆者が母になった後もこの「ブーブイの歌」を子供達に歌いながらあやしたり、寝かせたことがよくあった。この言葉の語源は「büü ai」（「恐れないで」）の短縮形としてよく繰り返されているが、会話での büüvei は単に「子守唄」としての意味を表している。

音楽教師 D さんは、「家畜の歌と子守唄どちらも親子の間に愛着を育む音楽的習慣である」と説明し、さらに「この習慣は、子供の親に対する信頼感が生まれ、親との間に絆が生まれ、その人の生涯を通じて広がり、（堅い）性格ではなく、柔和な性格を育むように仕向けられる」と主張した。Dagvadorj (2016: 3) はこの「ブーブイの歌」は母乳と同じくらい子供の発育にとって重要であり、「性格の悪い人については、『彼らの母親は彼らに「ブーブイの歌」を歌っていない』と述べた。つまり、「ブーブイの歌」という歌を歌っていないから性格が固くなったというのは「ブーブイの歌」が人間関係の構築と人格形成にも影響を与えることを示した。D さんの見解では、家畜に対する歌は「ブーブイの歌」と同様に機能している。歌は、思いやりのある抱擁とともに、母親に対する子供の信頼感を生み出し、互いに安心感を与え、愛情を共有することを促進する。家畜に対して牧畜民は代理人としての機能を持ち、家畜と子家畜は、あらゆる配慮と信頼をもって母子関係を築き上げていく。遊牧民が歌うこの家畜専用の歌は一時的なものであり、種間の関係を築いたら歌を歌う作業は終了する。しかし、バヤルさん夫婦が母家畜と子家畜の良い関係を築き、子家畜と母家畜のバヤルさん夫婦に対する信頼さも増えた。また、母家畜と子家畜の間にある種の相互的な信頼を築き、両者が群れに復帰できるようにする。良い関係を築く前に家畜たちに対する特別な世話や看護を継続していく必要がある。

また、音楽教師の D さんは社会的、道徳的側面は家畜にも当てはまると語っていた。幼少期に子守唄をあまり聞いていない人の性格は「カトゥー」、つまり「固い」人間になるように動物も「固い」家畜になる可能性がある。無視されたり放棄された家畜は、成長すると「野生」的になる可能性がある。孤児となった家畜は、身体的、感情的な発達に必要な社会的関係が欠けているから群れの社会に適応することができない。遊牧民は、人間の子供たちに子守唄を聞かせるように、種ごとにそれぞれ専用の歌を通じてこの孤児となった動物を癒し、柔和な性格を育むことができる。また、歌う側に対しても、子守り歌がストレスを解消する効果がある、という子育て研究もある。臨床発達心理士の山下は「寝かしつける時に子守歌を子供に歌うとおとなしくなる・寝ると笑うという反応が 0～17ヶ月の年頃の子供に見られると多くの子育てしている保護者が言っている」と述べている。この笑うという反応は保護者の養育行動を積極的に引き起こすように機能し、人に生得的に備わった行動パターンのひとつであり、子供が微笑する顔の特有なかわいらしさは、育児に疲れた親の気持ちをなだめ、子への愛情を高めさせ、微笑をもっと引き出そうとさまざまな働きかけを保護者に行わせる機能を持つとされる。笑うという反応は、子守歌のポジティブな効果を保護者に認識させる重要な反応のひとつであると考えられる。

チチグさんに「ラクダに歌いながら搾乳する後、どんな気分になりますか」と聞いてみたところ、ラクダが乳をよく分泌し、乳をたくさん出してくれるとラクダが私のことをよく認識できていると思って嬉しくなるし、歌を歌い終わった後にも気持ちがよくなるよ」と語っていた。チチグさんにも、この歌が感情的に機能していることがわかった。

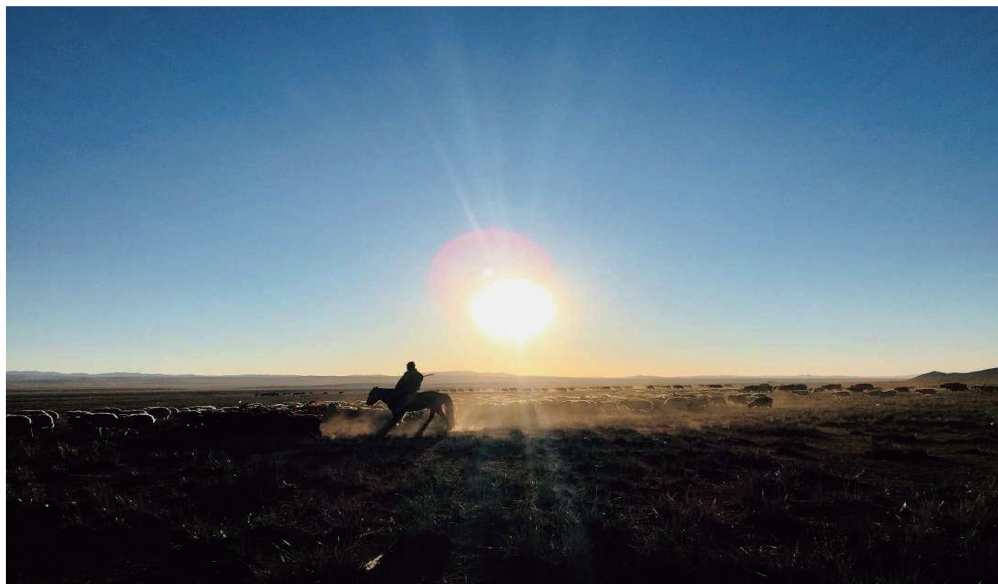


写真4 馬に乗って放牧しているバヤルさん 筆者撮影

4. 家畜に対する独特な言葉

4.1 かけ声

モンゴル遊牧社会では、家畜と共に生活している中で音楽以外に家畜に対して言語的なコミュニケーションをとることがよくあり、これをかけ声という。かけ声は文脈、繰り返し、母音の伸長、音色、大きさによって、異なる意味を伝える。モンゴル語の音に基づいているが、かけ声の起源についてまだ適切な定説がない。かけ声は種ごとにかけられている音声が変わってさまざまな音調変化をつけて意味を伝達する。例えば、馬に短い「チュク」と発する音は「スピードを早く出せ」「チューク」とはよりゆったりとした速度で移動するという意味を表す。独特な言葉は強調するために素早く連続して繰り返されることがよくある。

筆者は、トンドゴビ県ホラト村において、放牧、搾乳、乗用に際した、家畜各種全般に共通して使用されている一般的な言葉について記録した(表1~4)。この言葉は群れを方向づけるためではなく、個体呼び寄せ、身体接触を受け入れるように促す機能も持っている。馬を搾乳する際、人が馬の下腹部に接近したり、体に触ると母馬が敏感に動くときがある。この回避行動を抑制するため、[グルイ]というと呼ばれるかけ声で「グールイー、グールイー」と長い音を出すようにする。この変化は、そのかけ声が個体に対して向けられているか、それとも群れ全体に対して向けられているかが呼びかけられている家畜側の性別や年齢も重要な要素になる。例えば、「グルギ」は子山羊や子羊が放牧地から戻ってきて家畜の囲いへ入っていくのを促すときに使用されるが、種羊や去勢羊は「ハイ」というかけ声が頻繁に使用される。雌家畜に対して、かけ声は長い音を出すようにするほか、感情的も柔らかい音をしていることもわかった。

ある日、バヤルさんと一緒に羊とヤギの放牧に出た。バヤルさんは馬に乗っていたため、馬にも「チュク」や「チューク」とかけ声をかけながら走らせたりしていた。また、放牧している羊や羊の群れにも羊やヤギのかけ声「ハイ」を発し、群れから離れている羊やヤギに対して警告をしていた。バヤルさんは「かけ声は各種に対してコミュニケーションできるほか、野生動物の狼などともコミュ

表1 ウシに対して遊牧民が発するかけ声例 筆者作成

発声	意味	対象	場面
ホーホ	牧草地に行こう/移動しろ・スピードを上げろ	群れ	放牧
オブー	こっちきて、搾乳するよ	個体	搾乳
オー	動くな、落ち着いて乳を出せ	個体	搾乳
ジョグ	出産する時	個体	出産
ホロホロ	水を飲んで	群れ	放牧
イラ	子牛に乳をあげる時	個体	搾乳
ハシ	ケンカをするとき、やめろ	群れ	放牧
ホーグ	起き上がって	群れ	放牧

表2 ウマに対して遊牧民が発するかけ声の例 筆者作成

発声	意味	対象	場面
ゴールイ	こっちにおいで、搾乳させて	個体	放牧・搾乳
ジェホー	移動しろ	個体	放牧
イー	止まれ・動くな	個体	個体
ふー/チュク	スピードを出せ・速く走れ	群れ	個体
おー	搾乳するから落ちついて	個体	搾乳
ししー	水を飲んで	群れ	群れ
オルー	囲いに入って	群れ	群れ・個体

表3 ヤギやヒツジに対して遊牧民が発するかけ声の例 筆者作成

発声	意味	対象	場面
グルーギ (山羊)	スピードを落として/子羊と母羊を分けて	群れ	放牧
とーと (羊)	こっちにおいで	個体 雌	放牧
ハイ (羊と山羊)	止まれ/やめろ	群れ・放牧	搾乳、放牧
ジジュ (羊)	草を食べて	群れ	放牧
トロトロ (羊と山羊)	水を飲んで	群れ	放牧
ホロホロ (羊と山羊)	群れから出ないで/囲いの中に 入って	群れ	放牧
ドイグ (羊と山羊)	授乳させて、母子関係を修復する際に使う歌	個体	搾乳

表4 ラクダに対して遊牧民が発するかけ声の例 筆者作成

発声	意味	対象	場面
スホー	乗るから地面に座って	個体	放牧
チュクー	速く走れ・動いて	群れ	放牧
ゴルゴル	こっちにきて	個体	放牧
フゲー	起きて	個体	搾乳
トルトル	水を飲んで、塩を舐めて	群れ	放牧
フース	乳を出して、授乳させて	個体	搾乳

ニケーションできるよ。人間がここにいることを狼にも知らせる効果があるから」と言っていた。しかし、野生動物に対して独特な言葉やかけ声はあまりない。オオカミなど野生動物が人間の声を聞くと近づかない。筆者は家畜の群れ、バヤルさんといった人間、動物（馬、羊、山羊）などの各種に対してじっくり観察した。バヤルさんが羊や山羊の群れに対してかけ声を発する際、乗用馬は勝手に行動することなく、バヤルさんの指示を待っていて、応答すべき信号と無視すべきシグナルをよく認識できていた。

このようにモンゴル遊牧民は、日常生活の中でかけ声を使い、野生動物や家畜の種類ごとに言語的なコミュニケーションをとっていると考ええる。

ヒツジやラクダ、ウマに対する歌を歌う際、遊牧民は、ヒツジに対して「トイグ、トイグ」、ラクダに対して「ホース、ホース」、ウマに対して「ゴールイ、ゴールイ」と言いながら歌うと述べたが、ほかの場面でもこの独特の言葉を使う。特にウマに対して使用する「ゴールイ、ゴールイ」は日常生活でよく使われている。意味は2つあり、ウマを「こっちにおいて」「搾乳させて」という意味を表している（表2）。

4.2 歌とかけ声の有効性

本稿では、音楽やかけ声を使って家畜とコミュニケーションする事例を中心に述べた。なぜ遊牧民は音楽やかけ声を使用して家畜に向けて発声するのか、家畜に向かって歌うことやかけ声をする事で、家畜とコミュニケーションを成立でき、母畜が子家畜に乳を飲ませるようになり、さらには持続的な母性の絆を築くことができているのか。また、なぜこの歌やかけ声を使用することによってコミュニケーションや母子の良い関係を築くのか。

五家畜すべてに当てはまる、歌やかけ声の有効性については次のように考えている。家畜は群れを成すさまざまな鳴き声に反応するようになると同じように、この歌は遊牧民から世話を求めている家畜に対して生まれた直後からの訓練だと考えられる。波左間が述べたように牧畜社会の家畜も牧民を優位者・保護者として認知し受容していると言ってもよいだろう（波左間 2000）。もう一つは、牧畜民が母家畜から聞く音と似た音に適応させ、それらの音を発する家畜の反応を考慮している。つまり、家畜は、家畜と人間の間での共同訓練に依存しており、家畜が遊牧民の音楽取り入れる方法を教えるのと同じように、遊牧民が動物に一種の音（楽）の受容方法を教えるという、実践と相互訓練の共同制作になると考えられる。どちらにしても家畜をリラックスさせ、授乳を促進するために、音楽の力に依存している。

筆者は音楽やかけ声を通じて人間と非人間の境界があいまいになり、変化している可能性があることをよく認識した。遊牧民は種を超えたコミュニケーションの一形態として家畜歌を使用していることがわかる。訓練の一形態として、家畜に対する歌やかけ声は群れの社会構造を変え、人間が歌やかけ声を使用して支配的に家畜を指導しているようにみえる。しかし、それは遊牧民を群れのリーダーとしてだけでなく、母子関係の促進者としての独特の立場に置くことでもある。遊牧民は、人間の社会で習った言葉や音楽のジャンルの一つであるオルティンドーを利用し、このジャンルのメロディーと発声技法を組み込んで家畜に対して演奏をし、家畜間の関係を修復する。

5. 結論

本稿は、モンゴル国ドンドゴビ県ホラト村における音や音楽を介した人間と非人間の関係に焦点をあてて、音楽やかけ声がコミュニケーションやケアを促進する機能があることと、人間と動物、

動物と動物そして土地との関係まで影響を与えることを描いた。この家畜に歌う実践やかけ声は人間と動物、動物と動物、そして人間と人間のあいだに生成する異なる関係を相互に対話させた。バヤルさんとチチグさん夫婦が家畜にむかって歌を歌い、何回もこの作業を繰り返すことで家畜が子家畜に乳を飲ませるようになった。家畜はチチグさんと信頼関係を築いて搾乳に協力しており、チチグさんを自分の子のように扱うようになっていた。バヤルさん夫婦は、家畜の音楽に対する反応とかけ声の有効性を注意深く考慮しながら作業をしており、人間の感情を引き起こす音楽の美的意識を持ちながら家畜と接触していた。人間の子供の社会的発達と一般的に前向きな社会性を促進するために音楽を使用するというアイデアと目標は、生まれたばかりの家畜の世話をする行為にも取り入れられ、家畜に歌う行為を子守唄のようなものにした。広々とした牧草地、低木林、砂漠など、モンゴルの自然環境の中で学んだ牧畜民の伝統的知識は豊富であり、それが家畜に関する知識であれ、環境に関する知識であれ、こうした知識は彼らの生存に不可欠なものである。さらに、それは彼らの歌、詩、伝説、語り、そして何よりも彼らの生息地に対する感性の基盤となっている。

モンゴルの遊牧民の遊牧生活は、家畜のライフサイクルを中心に回っている。時間をかけ、家畜とのふれあいの中で感性を深め、その感性は家畜にとっても他人にとってもかけがえのないものとなる。また、この家畜に歌うという実践で形成するもう一つの関係は家畜と家畜の関係である。本稿で事例として取り上げている母ヒツジと子ヒツジの関係がそれにあたる。遊牧民は、母家畜と子家畜の間に絆を育むよう努め、それが成功すれば、母子関係を修復し、その関係が相互に受容することで母子ペアとして群れに復帰することができる。この関係の信頼と配慮は、歌を歌う作業が終わった後もずっと母家畜子家畜の感情をつなぎ続け、孤児や拒絶された子羊が群れ社会に参加できるようになる。そのような意味で、家畜に対する歌は、春の出産時期でよく起こっている家畜の社会性の問題を解決するための重要な技術となっている。歌の効果は、人間と人間の間にも出ることがある。春に家畜に歌を歌うことは、人々に歌を学ばせ、練習する機会を与え、秋には春期間に家畜に歌ったその経験をもたらし、牧畜民が羊に与えるものと同じような静けさと慰めを表現できる歌が歌えるようになる。

また、Fijn は「若い動物を使って乳の出を促すことは、チベット、アフリカ、インドのウシに対して行われているが、この方法、つまり音を利用することを使って母馬、駱駝、羊から乳を得るのは、内アジア独自の方法かもしれない」と述べている（2000：134）。つまり、母の家畜は、自分の意志で乳を出すかどうかを決めることができる。そのため、遊牧民は乳の流れを促すために音や音楽を使う。例えば、馬の搾乳の場合、歌うことに加えて、子馬が乳を吸う音を模倣する。牛以外の家畜から乳を得るためにこの方法を使うのは、内アジア特有のものである。

上述したように、モンゴル遊牧民は家畜を連れ出すとき、放牧するとき、搾乳するとき、乗馬するとき、捕まえるとき、競馬するとき、餌を与えるときなど、さまざまな状況で家畜に音を使う。このように音をつかってコミュニケーションをとるモンゴルの遊牧民が家畜に接する際、感情的になるという特徴がある。特に乳を搾るときには、牧民たちはとても優しく穏やかになり、彼らの声はより音楽的に変化する。家畜をコントロールする必要があるときは、命令や指示の鋭いかけ声や言葉を使い、家畜を落ち着かせたいときは歌声が伸びやかになる。

また、搾乳という作業は、牧畜民と家畜の身体的接触を促すことであり、牧畜民の食糧需要を満たすことである。仔家畜と母家畜、搾乳者の間の緊密な身体的接触は、彼らの親密な関係の基礎であり、それぞれが相手の匂い、手触り、味、音を感じ取りながら、行為者の参加を動機づける。さらにフィールド調査を通じて、こうした身体接触だけでなく音や音楽とかけ声による刺激が、感情

的な側面からも関係を強化することが分かった。かけ声と歌は、人間、非人間、そして自然の間の物理的な区別を、音や音楽を通して結びつけることによって超越するための道具となり、人間と家畜が関わるあらゆる家畜化プロセスに参加するすべての主体間に、生命を与える安らぎと感覚的なつながりを提供する。

モンゴルにおいては、古来よりシャーマニズムが信仰され、人間と動物の霊的なつながりが重視されてきた。モンゴルの遊牧民が歌を通じて動物と関係を築く行為は、シャーマニズムの世界観、動物との共生関係、さらには実践的な牧畜技術の交差点に位置するものであり、人類学的視点から多角的に分析する価値を有している。

また、本稿は近年の「自然と文化」を巡る人類学やマルチスピーシーズ人類学や、これまでの研究者たちが積み上げてきた考察やモンゴル社会の人間と動物に関する理論を参照しながら、人間と非人間の関係を述べてきた。しかしこれまで音による「自然と人間」の感情的関係を議論したものには、マルチスピーシーズ民族誌研究の分野でも限定的であった。本稿はこれまで取り上げてこなかった音や音楽による人間と動物との相互作用的な感情面にアプローチしたものである。この結果、音による自然と人間の関係、さらに自然と人間の感情的なつながりがあることが示唆された。モンゴルの草原という環境において、音楽は人間と自然の仲介者として重要な役割を果たしており、音楽は耳で聴くだけでなく、身体にも響き、その影響は共に暮らすコミュニティの関係を良好にすることが示唆された。

また、音楽家Dさんが説明したように、音楽は私たちに、異なる存在の美学や感情と関わる機会を与えてくれ、人間は、草原の風景の穏やかで広大な性質を引き出し、それを利用して、子育てや社会的発達に関する深い感情的な概念を家畜と共有することができる。バヤルさん夫婦は、歌に対する家畜の反応を考慮に入れて、家畜の母子関係を作り、リラックスさせる方法を取り入れている。これは、家畜を美的価値のある重要な聴衆として扱うことで、家畜が単なる生産資源としてではなく、感情的・文化的な存在としても認識されていることを示している。

参考文献

ウィラースレフ, R.

2018『ソウル・ハンターズ—シベリア・ユカギールのアニミズムの人類学—』奥野克巳・近藤社秋・古川不可知訳、亜紀書房。

奥野克巳・山口未花子・近藤社秋編

2012『人と動物の人類学』春風社。

奥野克巳

2019『マルチスピーシーズ人類学：人間・動物・モノのあいだ』春風社。

小長谷有紀編

2014『梅棹忠夫のモンゴル調査——ローマ字カード集』国立民族学博物館調査報告122。

小長谷有紀

1996『モンゴル草原の生活世界』朝日選書 551。

波佐間逸博

2016『牧畜世界の共生論理——カリモジョンとドドスの民族誌』京都大学学術出版会。

フェルド・ステイーブン

2000『音響認識論と音世界の人類学—パプアニューギニア、ボサビの森から』山田陽一訳、山

- 田陽一編『自然の音・文化の音環境との響きあい』昭和堂、pp 26-64.
- 山口未花子・石倉敏明・盛口満編
2024『動物をえがく人類学—人はなぜ動物に惹かれるか』岩波書店、pp 233-243.
- 外国語文献
- Atwood, C. P.
2004. *Encyclopedia of Mongolia and the Mongol Empire*. Facts on File.
- Dagvadorj, J.
2016. *Büüvein Duu*. Soyombo Printing, Ulaanbaatar.
- Fijn, N.
2011. *Living with Herds: Human-Animal Coexistence in Mongolia*. Cambridge University Press.
- Holbraad, M., & Pedersen, M. A.
2017. *The Ontological Turn: An Anthropological Exposition*. Cambridge University Press.
- Humphrey, C., & Onon, U.
1996. *Shamanism and the Image of the Self in Mongolia*. *Anthropology Today*, 12(4), 11-15.
- Hutchins, K. G.
2019. *Like a Lullaby: Song as Herding Tool in Rural Mongolia*.
- Ingold, T.
1980. *Hunters, Pastoralists and Ranchers: Reindeer Economies and Their Transformations*. Cambridge University Press.
- Ivarsdotter, A.
2004. *And the Cattle Follow Her, for They Know Her Voice*, 150-153.
- Madison-Piskatá, J.
2018. *Golden Mountain, Iron Heap: A Poetic Ethnography of Extraction in Eastern Mongolia. A Non-secular Anthropocene: Spirits, Specters and Other Nonhumans in a Time of Environmental Change. More-than-Human* (AURA Working Papers Volume 3, edited by Bubandt N., pp. 46-52).

Human and Non-human Relationships through Sound —Songs and calls to livestock in Kholat Village, Dundgobi Province, Mongolia—

SARANTUYA

(Graduate School of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University)

The purpose of this paper is to elucidate how humans and animals build emotional and trusting relationships through sound and song in Mongolia's nomadic society, and to gain a new perspective on the culture of living with livestock. Spring in Mongolia, especially in the Gobi region, brings severe climatic changes such as strong winds and sandstorms. This time of year (March-May) is

also the birthing season for livestock, and is a season of many difficulties for both pastoralists and their livestock. This is because it is during this period that mothers and their offspring often die due to disease or dystocia, newborn livestock often become orphans, and female livestock often reject their own offspring. In such cases, pastoralists sometimes use species-specific calls and songs to restore the mother-infant relationship in order to strengthen the bond between mother and calf and to encourage lactation. This paper discusses the case of singing songs to camels and sheep in Kholat Village, Dondgobi Province, Mongolia, and depicts how the mother-child relationship and adoption is actually established through singing. It also discussed how these songs for livestock are related to cultural and spiritual traditions and shamanism in Mongolian pastoral societies. In addition, we have incorporated recent anthropological perspectives, particularly those of multispecies anthropology, to suggest that sound and song play an important role in creating an emotional connection between humans and animals.